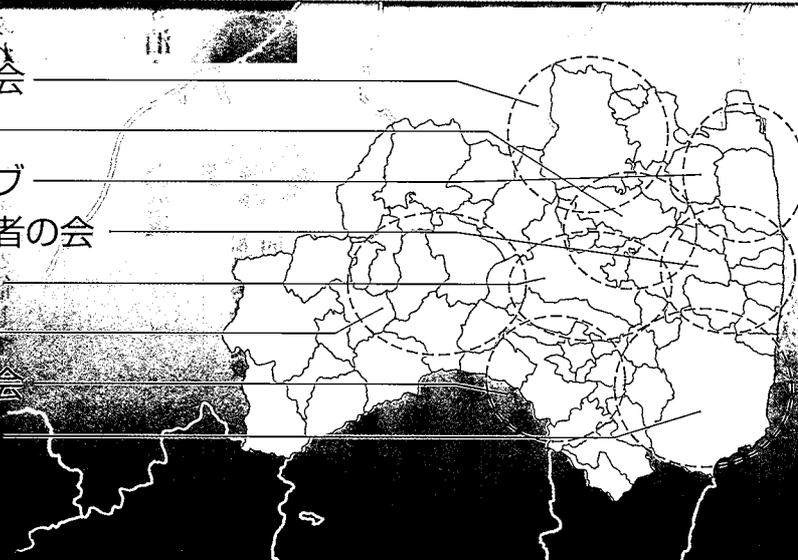


福島支部

- 福島地区電友会
- 電友吾妻会
- 電電相馬クラブ
- 電電原町退職者の会
- 電友あさか会
- 会津電友会
- 白河地区電友会
- いわき電友会



ふれあい



福島地区電友会
伊藤 鉄次

「ふれあい」、私の好きな言葉の一つであります。お互いに触れること、ちょっとした交流を意味します。

喜寿を迎えた機会に、これまでに出会った「ふれあい」をふり返ってみました。

・二甲会のこと

福島商業高校3年の時、第36回甲子園大会に出場、福商として2回目の甲子園出場ということから、二甲会と名付けました。

1〜2年毎に開催し、ある時は名監督和田先生を囲み、またある時はゴルフコンペをセットしたり、大いに盛り上ったものでした。

しかし、監督の死後、他界する球友も増えたこと、結成して60年近くになったことを機に解散することにしました。

甲子園という高嶺の夢を追った球友との「ふれあい」は、私の一生の宝物であります。

・退職者の会のこと

私は、電電公社に入る前に全電通福島県支部にお世話になりました。

これをきっかけに、特別社員として電電公社に入社することになりました。

昭和54年頃、福島県支部が中央本部の方針に反する言動をとり続けたことがあり、地方本部から、支部機能を停止されるという事件が発生しました。いわゆる福島県支部の組織問題であります。

更送された前役員に変わり、何故か私が役員を任うことになりました。役員経験は全くなく、全電通に対する恩返し、真意は知らないが不思議な正義感から引き受けてしまいました。

その時代、時代を正直に生き、そしてふれあった多くの仲間が私にとって大きな財産であります。

退職後も退職者の会の役員として、県内各地区協はじめ、電友会との交流を大切にしていきたいと思えます。

・東日本大震災のこと

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、私たちの生活を一変させました。地震津波は多くの人命を奪い、家屋を流出させ、そしてインフラを破壊しました。

さらに、福島では東京電力の原発事故、放射性物質から身を守るための避難生活を余儀なくされた仲間が沢山おります。

これらの被害に比べれば微々たるものが、私のマンションも、地震で大規模半壊に

なりました。電友会はじめ電通共済生協には大変お世話になりました。

不幸にして被災された方には、電通共済生協に加入していたため、助けられた。入っていいよかったと言っています。お互いに助け合うシステム、それが生協であり、ここにも「ふれあい」があると信じています。

3泊4日の大震災



福島地区電友会
加藤 良栄

大震災の3月11日。私は前の職場のITK（東北通信建設）のOB総会が仙台市で開催されるので、午後福島発の電車で仙台に向った。午後2時20分会場の「仙台ガーデンパレス」に到着し総会は午後2時30分から開催する。懐かしい多くの人達と逢えて楽しかった。しかし、開始してすぐ午後2時46分強烈な揺れに会う、余りにも強くビルも壊れるのではないかと思ひ、天井の灯火設備なども音をたてて落ちて来たので皆んなテーブルの下に潜り揺れの治まるのを待った。総会はすぐ解散となりそれぞれ帰る事になる。同じ福島の人さんと白石のOさんと3人で福島方面へ帰る

ため仙台駅へ行く。途中のビルに亀裂のあるのがあったのが崩れたりして居ない。駅に着くまで何度も強い揺れに会った。駅では内部が壊れたらしく危険なので駅から表に出るよう指示される。西口には大勢の人が行く場所もなく建物から離れて寒い中何時間も待つ携帯電話は通じず、どこへも連絡出来なかった。新幹線は勿論、バスの運行も全面ストップで帰る見通しはない。待っている間少し市内を歩いて見たら多くの人が倒壊するかも知れないビルから離れて中央分離帯の空地に佇んでいた。ガラス戸の壊れているのが多かった。駅前で待機している中、避難者を受入れるとの案内があったので、Sさんと2人タクシーで避難所である宮城県庁へ入る。県庁の建物の中なので寒さはしのげた。夜は一睡もせず過す。

一夜明けて12日。朝早く米飯とふりかけだけの朝食が出る。昨夜から全然食べていないので普通の2倍を食べてしまう。居場所は2階の広いフロアの通路にダンボールを敷いて毛布一枚で過す。勿論、着の身着の儘だ。昼食はパンをもらう。福島に帰る方法を探ぐったが「JR」高速バスも回復の目処がない。公衆電話の行列に加わりやっと福島と連絡がとれる。今日も帰れないと妻に伝える。夜食

もパンだけだった。

3日目13日。6時に米の朝食あり。県庁の広場に臨時の薬局が出来る。常備薬を持って来てないので心配だったが、すぐ診察を受けて3日分をもらい、昼食後すぐに飲み一安心する。今日もJRすべての運転不可能、バスも見込みなしとの事であきらめる。夜にSさんが娘さんに何とか迎えに来れないかと要請して居た。

4日目14日。昨夜は食事無し今日の昼始めて短いパンひと切れだけもらう。午後2時頃Sさんの娘さんが来るので一緒に帰ろうとの事、助かった。それまで一緒に帰ろうとの人4人は帰る見込みも無く可哀想だと思った。3泊4日もお世話になり有難かった。肩の張り薬を頂いたり、マッサージもして頂いた。女の人達皆んなからお茶を頂いてお別れをする。Sさんの娘さんの運転で4号線の国道を福島の家まで送って頂く。Sさん親子にはお世話になって有難かった。



五ッ橋 桐ケ窪 明夫

3・11震災を振り返る



福島地区電友会
菅野 達司

○我が家の防災対策

家は高台にあり水害の心配無し、33年前の宮城県沖地震後の建築だから壊れるときは皆一緒、常々注意しているのは火災のみ、地震の時は居間と台所の境の通し柱周辺が安全で出口に近いと話合っている。当時は家内と二人テレビを見ていた、おや！大きいぞと何時ものように立ち上がり様子を見た、一旦揺れが治まったところで情報を得ようとテレビをつけたところ、チャイムが鳴った。急いで外に出て見ると道路には近所の皆さんが飛び出し私達が出て来ないので大丈夫かと案じて下さったのチャイムでした。外に出て驚いた、屋根の五段重ねの棟瓦が芝生の庭に転げ落ちている、これは大変と見回ると屋根の他は風呂のタイルに少しの亀裂、書棚の乱れなどがあつた。テンヤワンの災害にまあ良かったはず雨漏り対策をと思うが屋根に登る自信は無い。さて建築会社に電話するも通じ無い。困っていると隣の家で頼んだ大工さんが、隣はかなり酷いが、済み次第仮工事をしてくれりと翌日終了したので一安心。瓦屋さんは大

多忙、特に同じ瓦は焼いてないと遅くなったが24・4・28日修復出来た、親切な大工さんで予想より廉価に済んだ。

○援助に感謝

日頃交誼の友人・隣人に沢山見舞って頂いた、また、一番困る水を何度も井戸水を汲んで運んでくれた友がいてとても有難かった。私は33年前の宮城県沖地震の際仙台に住んでおり、食料の確保が大変だった事を、生家の兄弟に、電話の一つもくれなかったと後日談をしたことがあり、今回は姉の息子が早速沢山の水と食料を持って駆け付けてくれた。

○行政の動き

・いち早く支所で給水車による支援が行われたが遠方からはとても受けられず、一日遅れで近くに給水車が数回配車された。
 ・被害届を提出したところ数日後調査員が来て家の周りを詳しく撮影・内部は調査しないとの事、目的はデータ作りの方であった。
 ・確定申告に100万未満でしたが資料を添付するも控除対象にはならなかった。

○支援活動

3月13日東電原発1号機の爆発による避難者が急増し、予定外の中学校体育館に避難者を受け入れるのでと、ボランティアの要請が所属の里山ふれんずにあり、農家の会員から

米や芋を、会の畑から葱など掘出し、約50人に炊き出しや荷物の運搬等2日間従事した。学校も被害を受けており、外出を控えるよう報道されている中、帽子・マスク着用の作業でした。

○災害後の暮らし

・除染物の仮置き場を町内会用地に設置する臨時総会(430戸)を開催決定したが全戸賛成とはいかず、しこりを残した。

・「蓬萊里山ふれんず」の活動拠点が放射能に汚染され活動が大きく制約され困っている。竹林整備の伐採竹を利用した竹炭づくりや子供達との筒取り、勿論食する事も出来ない。また、カタクリの花群生地も探訪者が減って寂しい。

・「桜台里山遊友クラブ」は町内会所有地に遊歩道を整備しアジサイ2千株を植え、整備のため伐採した檜・桜などを利用して毎年子供達と椎茸・なめこの植菌をし収穫を楽しんで来たので、2～3年のホダ木に沢山茸が出ているのに放射能が高く収穫できず悔しいというか当面出来ないには精神的に大被害を感じています。

多くの避難家族を思い復興対策がすみやかに達成するよう期待し現状に対応している昨今です。

混乱時にはリーダーが必要



福島地区電友会
斎藤 英男

地震の時、私は福島市保健福祉センターで、誤嚥予防セミナーを受講していた。「高齢者の肺炎の多くが誤嚥によるもの」というキャッチフレーズに惹かれて参加したのだった。

さて、地震がきたとき会場は大混乱。テーブルの下にもぐる者、廊下に飛び出す者、ただわめくだけの者、肝心の主催者（女性）は天井から吊るされた大型テレビの大きな揺れを両手で支えているだけ。私は、受講の中で最年長と思っていたので「この混乱状態を静めて安全を確保する」ことが責務のような気がした。30名程の受講生に大声で呼びかけ、全員を部屋に戻して、テーブルの下に潜ってもらい落下物からの怪我を避けることができた。

テレビを支えている主催者は、「危検だ!」といくら説得しても手を放そうとしなかった。地震がおさまってから、このことを主催者に尋ねたら「頭が混乱して何をやったか覚えていない」とのことだった。もし、あの大型テレビが落下したら大けがをしただろうと

思う。

このことから、地震等で大衆が混乱状態に陥ったときは、その混乱を收拾する方法を咄嗟に判断して適切な措置をするリーダーが必要だということ強く思った。私の場合、現役時代の災害訓練や市外通話確保のための異常時措置の仕事が役に立ったのかもしれない。電友会の会員は、幾多の困難を乗り越えてきた歴戦の勇士揃いなことから、混乱時にはリーダーの役割を積極的に買って出て、地域住民の安全確保に寄与していただきたいものである。

(参考)

災害とは関係ないが、冒頭の受講要旨を披露しご参考に供したい。

誤嚥の原因と予防

唾液分泌の減少 唾液腺を毎日マッサージして、腺の機能低下を抑制する

嚥下反射力の低下 唇、ほっぺた、あご、舌の体操をして嚥下関連筋肉の衰えを抑制する

誤嚥予防体操の例示

ホームページ 長寿科学振興財団「健康長寿ネット」の「嚥下障害のリハビリテーション（基礎訓練）」

忘れることの出来ない

東日本大震災の大惨事



福島地区電友会
宍戸 直司

昭和57年電電公社を依願退職するまでの50年間、様々な災害に遭遇してきたが、この災害は私の一生で忘れることの出来ない大惨事であった。

東日本大震災前までは宮城沖地震・三陸地震・チリ地震津波・新潟地震・酒田大火・山形小国大洪水などが記憶に残っている。

小生と災害の関係は、主として線路宅内の所外部門を渡り歩いた関係もあり、直接・間接的に現地に赴く機会が多く災害の悲劇を目の当たりに味わうことが多かった。

平成23年3月11日福島市の天候は朝から晴天に恵まれ、正に洗濯日和であった。

常日頃から減多に風邪など引かないと自慢していた小生も、鬼の霍乱で2・3日前から床についていた。遅い昼食の後、床に戻ろうとしていた矢先、突然家全体が上下左右に激しく揺れ立っていらなくなり、その場から脱出しようとしたが身動きのとれない状態がしばらく続いた。そのうち神棚・仏壇・家具等が大きな音をたてながら重なり合っ

てきた。

食器の破損で足の踏み場も無く身の危険を感じながら、九死に一生の思いで屋外に脱出することが出来た。その内余震も弱まり、間隔も次第に長くなり、洗濯日和だった天候もいつしか小雪が舞い寒くなってきた。厚着の衣類に着替えるべく家の中に戻った。

家中足の踏み場もない惨憺たる光景に我が目を疑った。身体だけでも無事だったことを良しと思うほかない。当夜は近所に住んでいる娘の家に身を寄せて一夜を明かした。

その後の家屋の判定では全壊と判定され、継続居住することは危険とのことで、住み慣れた家屋は全て解体することにした。

この度の被災に際して、電友会をはじめ各団体から心温まるお見舞い義援金を頂戴し大変恐縮しております。

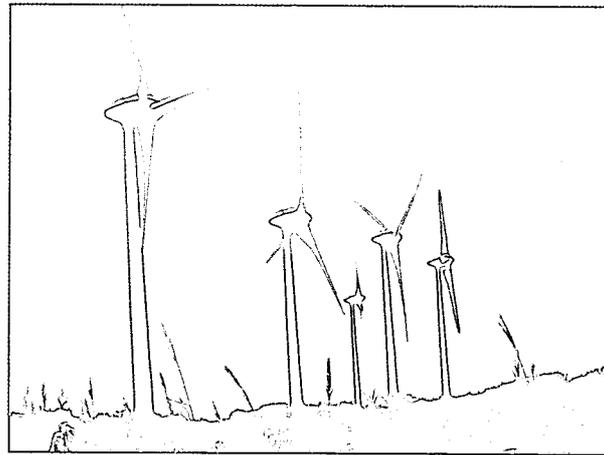
・福島県北地方の言い伝え

「満歳楽山（マンザイラクサン）と地震」

福島県と宮城県境の海拔898メートルの山、昔から地震に強い信仰の山と言われている。小学生の頃よく母から聞かされていた。村の若者が山仕事を終え頂上の岩場で昼寝の後、村に帰ってみると大騒ぎ、地震で集落が全滅していた。後々聞くと万歳楽山で無事だったのは神のご加護があったからだとい

それからは地震発生の際は「マンザイラクサン」と三回念仏を唱え無事今日に至っているとか：

残念ながら東日本大震災時小生にはこの念仏を唱える余裕が無かった。



布引高原の風力発電（福島県）五ッ橋クラブ 笹原 弘

日本政府と東京電力の功罪を問う！



福島地区電友会
仁後 康

2年半前の東日本大震災における東京電力第一原発爆発事故は福島県、宮城県、岩手県並びに茨城県、栃木県等関東一円の都県をし

て東日本太平洋沿岸領域などに甚大な悪影響と大罪を犯しました。

政府・東京電力は「原発は安全」と言い続けてきた結果、今回の「爆発事故放射能」の影響はおよそ18万人の避難生活者はもちろん何千万人と言える県民皆さんへの裏切り行為です。

そして先般の「政府の原発事故収束宣言」「東京電力の原発再稼働」などの発言は電力需要供給関係はあっても絶対許せるものではありません。

東京電力原発の需給状況は全体の12%程度から現在2%（稼働休止から）程度だと言われ、大半は火力発電（石炭、天然ガス等）70%風力、太陽光発電等10数%とされています。政府東電は原発稼働の高発電と低コスト性、利便性並びに県市町村への補助金交付、各種収入、地域雇用拡大と地域経済の繁栄などその「功德？」を主張しています。

しかし、「原発爆発事故放射能」の大罪はその「功德」を遥かにしのぐ大惨事を犯しています。

これらの原発爆発事故状況は皆様方にはすでに承知し認識を深め、原因究明と再発防止が完結するまで「原発再稼働はありえない」または「原発廃止」と大半の人々が声を大に

して訴えることと思われず。

すでに原発爆発事故から2年半程度経ちました、私は本年度年賀状に「原発の 海浜して 初日の出」と凡句を書きました。被害に遭遇した相馬市原釜地区の初日の出を拝みながら「怒りの涙、悲し涙、心の涙」が自然と湧き立ちました。

70歳過ぎ年寄りの涙もろさが素直に正直に湧き立ち、この世の諸行無常さを痛切に感じました。

原発爆発事故における福島県全域ならびに福島県民の皆様方が被った惨状については、すでに政府、福島県、市町村機関やテレビ、新聞などのマスメディアなどご認識のことと思われませんが、しかし、2年半の経過後においても、東電原発爆発事故の惨状は何一つ解決していません、何一つその大罪を解消していません。

その主なる惨状を述べさせて戴き、皆様方の認識を更に強めて戴きたく存じ上げる次第でございます。

◎原子炉と汚染水関係

・破壊された鉄骨、仮冷温状態の核燃料、核物質、汚染水をそのままの状態維持管理され、仮電源のメルトダウンがあれば再爆発の危険性は依然としてあること

・汚染水関係

高濃度の汚染水（トリチウム、ストロンチウム、放射線等）保管貯蔵タンクから汚染水が漏れて、山からの地下水と合流し沖海に排水され、まだ200余りの同型のタンク取替え作業、汚染水土壤の凍結防止未作業など未解決と完全除去方策が欠如されていること

・原子炉の廃止

1～4号機の廃止も手付かず、5～6号機の廃止未決定、第2原発の存続未定（政府、東電は再稼働検討、県市町村は廃止要望）

◎放射能、放射線関係

・貯蔵施設関係
本貯蔵施設の未決定、中間貯蔵施設の未決定、仮置き場の継続残地（3年以内が未解決）であること

・被災地域等関係

20K区域内非難地域、50K区域内仮宿泊と一時避難地域と外出規制、除染地域の選定等などが不鮮明（各市町村で相違）であり県民市町村民に行き渡っていないこと、また福島県から東北一円、関東一円などの被災状況公開が明らかでないこと

◎被災、人災関係

・被爆関係
政府機関では年間1ミリシーベルト以内と

して県民調査と年少者対象として体内染色体の変化、甲状腺ガン検査、ホルボダイカウンター調査などを行い被爆状況を実施し把握しましたが、その結果として治療や投薬予防方法または生活上の環境整備など何一つ解決されておりません

・避難生活者関係

福島県内の市町村は勿論、全国都道府県の地域で避難生活者を受け入れて仮設施設を提供している市町村様には感謝と御礼の気持ち一杯ですが、3年近くに及ぶ避難生活ではうつなどの症状や持病の悪化など心身不良の避難生活が続いています、中にはアルコール中毒者、日々パチンコ、競馬などでの時間つぶしなど批判する方もおられますが、避難者の方々の生活環境は不安と恐れの日々の継続です、是非とも暖かいご支援をお願いします。

・放射能除染関係

福島県内の除染区域は浜通り地域、中通り地域一部が対象として会津地域は除染地域外として位置づけられ、家屋（屋根、壁、雨どいガラス戸等）、敷地内（庭、花壇等5cm以内）、敷地外5メートル以内の範囲で除染が始まり約50%～60%各市町村で終了したと言われています、これも2年半の経過と0.5マイクロシーベルト以内での生活に支障がな

いと言われてきました。

その後大雨台風などの季節的な影響から山川、谷、土手等除染されていない地域からの流水が家屋敷地内に流れ込み、例えば敷地5cmの高さで0.7マイクロシーベルト以上、1メートルの高さで0.9以上に戻ってしまった家屋が相当数あると言われています。まだまだ確かな除染方法や山、川、谷地等の除染計画はまったくありません。

・食料品と風評被害関係

福島県内の山、川、湖、海等被害状況の未調査、未解決からきのこ、山菜、牧草、魚介類、米から野菜、県内産肉類、各種加工品等県内すべての食料品がいまだに風評被害や50ベクレル以内の恐慌に悩まされています。

福島県内全域、宮城県浜地域、茨城県内、千葉栃木県内一部地域の食料品は要注意との風評被害レッテルが貼られています、国および県、市町村関係機関はこれらの問題点について、食料品を個別に精査し公開し安心安全な食料品生産に最も力を入れて取り組んで戴きたいところです。

・原発に伴う賠償関係

避難区域生活者、一時避難地域生活者は一人一月当たり平均15万〜30万、福島県民は一時金一人当たり4万〜12万円（1回限り）の補

償金が支給されてきました。しかし、その生活実態は重苦しい生活状況の連続です。代々のお墓、土地、財産等の低減化、生産物からは無収入、商店、病院の改廃と生活環境の崩壊はおろか家庭、家族、親子、兄弟姉妹の分散、必要経費の増大等その苦労心労は計り知れなく甚大な損害です。

政府および東京電力関係者はこれらの際立った事象を作り上げてしまったこと、社会経済の混乱、生活者の生活収入、喜怒哀楽や平穏な日々の暮らし、苦労や心労の解消等などどのように戻し改善させてきたのでしょうか。一国民一市民が声を大にして望む方向に耳を傾けてきたのでしょうか、まったく無関心とはいきませんが、解決策解消策が聞こえてこないのです、検討しています、やっていますでは時間がかかりすぎます。「県と市町村と一緒にやりましょう」「一緒に行動しましょう」「一緒に解決解消しましょう」との取り組みがぜひ必要なのです。身近な出来事として地域一体となった解決解消策を講じていただきたいと思います、下手な一筆をしたためました。皆様の暖かいご批判ご指導をお聞かせくださいませ。

その時私は



福島地区電友会
山口 照代

ガタツクユサユサ、今まで経験したことのない大きな揺れ。飯坂で行っていた詩吟の例会が、間もなく終ろうとしていた時でした。

誰ともなく「外へ」の声に、慌てて外へ出ると、駐車場の自動車や電柱などが激しく揺れており足の竦む思いでした。一旦揺れが治まると、急に家の事が心配になり、余震の続くなか、普段は20〜30分の処を1時間以上かけて帰宅しました。

家に着くと、隣の奥さんが待っていたかのように「山口さん、お宅から水が噴出しているよ!」と声を掛けて来ました。行っただけと水道管が切断したのか、側溝に水が勢よく流れ出していました。慌てて止水栓を回し事なきを得ましたが、塀の石積みは崩落、幸い内側に落ちたので、人や車に迷惑を掛けずにすみました。

家に入ると、冷蔵庫・テーブル・サイドボード等が2・3メートル移動し、物が散乱、足の踏み場も儘ならず、額は宙ぶらりんの状態でした。

各部屋の状態を確認しようとしていた矢先

民生委員の方がおいでになり、「すぐ非難所へ」と伝えてきました。取り敢えず、防寒具と身の回りの品物を持って、近くの渡利学習センターへ行き、そこで1泊2日の避難生活をしました。

避難所で一番困ったのは、トイレでした。黒いポリ袋を渡され用を足すのですが、寒さもあつて高齢者には応えませんでした。

翌日、家に戻り外回りを点検すると、土台や梁が歪んだせいか東側のガラス戸は、枠との間に隙間ができて開け閉めが出来ず、また、一部屋は入り口の戸が開けられず、約4ヶ月間に亘り内部の状態を知ることが出来ませんでした。

水道も使えず、部屋中が散乱状態で、片付けも儘ならないので、娘の家で厄介になることにしました。幸い車の燃料は、ほぼ満タンでしたので、一先ず、家にあつた灯油3缶を持って庭坂へ向かいました。

約4ヶ月間、娘の世話になり、その間、週に数日、帰宅しては家の中の片付けや整理をしました。精神面も含め落ちつくまでには約1年かかりました。

3・11を通して、自然の恵みと恐ろしさを痛感しました。高齢になればなるほど、防災に対し日頃からの備えが如何に大切かを肌で

感じているこの頃です。

家屋や塀等の修理には、予想以上の経費が掛かりましたが、お見舞金や電通共済の補償等が大きな助けとなりました。

最後になりましたが、全国の電友会会員様から寄せられた温かいお心遣いに、改めて感謝申し上げる次第でございます。

地震・雷・火事・おやし



電友会妻会
伊藤 邦子

恐ろしい順番の代名詞として、子供のころ

からなんとなくそう言い聞かされてきた。

順番はともかく短ければどれも被害はない？最近震度5強の地震があつたが「お！大きいな」と感じた程度で恐怖まで至らない。被害もない？慣れ過ぎかな？ただ、短くとも最近は何いものがある。集中豪雨・竜巻・強風とそれに繋がる災害は怖いし被害もすさまじい。なんとも痛ましい。3・11大震災を思い出される。

さて、3・11の震災の翌日からレスキュー車、消防車、救急車、パトカーが隊を組んで国道4号線を北上する。私の住まいは4号線

沿いの14階建の5階部分の道路側の角部屋。時を問わず全部のそれらの車がサイレンを鳴らして北上、すさまじい迫力である。テレビの画面の情報と併せて非常事態であることを肌で感じる。我が家の南前の交差点を東に向かうと道なりに70kmで南相馬市、南下すると原発地域とつながる。北へ1kmぐらいのところを東に向かうと相馬市方面。救急車両は1台も東に向かうことなく北上する。「福島も助けて！」と叫びたくなる。

そうとは知らずに、福島市の浜通り方面へは立ち入り禁止だったのかも知れない？

私は地震時留守をしていて夜遅く戻り「あら、あら」という程度の被害で生活に不自由はなかった。実はマンションの住人に避難勧告があり無人だったのも知らずに、電気・ガス・水道に異常はなく、夕食の準備してゆっくり風呂につかり洗濯もして何の不安もなく過ごした。余震もあつたのだろうか；そして北上する救急隊を見物。救急車両は関西が多く滋賀、兵庫、大阪等通過した翌日にはテレビの画面にその車両が見える。自衛隊の車で海田市なんてどこにあるのかさえ分からない。来るだけでも大変、加えて未曾有の災害、それは困難極めた救助だったろう感謝の極みである。

その後、警察車両のバスが南前の交差点を東に向かつて毎朝7時頃通過する。7・8台連なつてときには10台以上の車両が行く。規制監視だろうと1人合点。2時間はかかるだろう阿武隈山系山道。ご苦労様と手を合わせたものだ。飯坂温泉のホテルを拠点に居る屈強な若者達だ。頭が下がる。災害は終わらない。人が戻らない。小学校の運動会は3時間限定。幼稚園を含めてクラス減。さびしい。人が戻ることが頑張りにつながる。

先日、横浜鶴見の方に会った。復興コンサートが総持寺で行われ、「福島黎明高校のコーラス」が素晴らしく感動し涙が出たと毎年来てくれる。「福島のコーラスは素晴らしい」と福島を総評してくれた。そんな頑張りの一つひとつがみんなの力につながるのではないかと思う。地震・雷・火事・おやじより人を寄せ付けないものがあつた。

東日本大震災の思い出



電原町退職者の会
岡本 清義

平成23年3月11日も午後からグラウンドゴルフの仲間と練習中、突然大きな地震が発生

大きな揺れと地鳴りで立つておられず全員地面に座り込みました。落ち着いたところで用具等をそのまま倉庫に入れ全員自宅に向かいました。途中余震が何回となく発生し、交通渋滞や屋根から落ちた瓦が道路上に散乱のためいつもより倍位の時間で家にたどり着きました。

家に入って見ると家内が呆然としていて怪我がないかどうか確認し、2階の転倒した物の片付けを終え、その後はテレビのニュースに釘付けでした。

翌朝、浪江から親類大人子供10名が避難してきました。二人暮らしの家に10名が避難してきたことにより食事の準備にてんてこ舞いでした。

次の日まだ夜が明けない4時頃、原発爆発で風向きが北の方に向いてるとの電話連絡により2次避難に10名が立ち去りました。

その後4〜5日夫婦2人おむすびを中心に暮らしていたら防災放送で、小学校体育館において市から説明会を行うので集合するよう案内され出席したところ、生活物資が全然入ってこないため、明日から2日間バスで避難することとなります。2日間で避難しない方はその後は自己解決してくださいと説明があり、その場で明日避難する申込みを行い家

に戻り準備にかかりました。

翌朝8時集合場所に行ってみると、群馬からのバスが大雪のため遅れるので一旦家へ戻り待機、その後再び自宅待機午後1時に集合バス22台で群馬県片品村へ向かい出発、途中関東圏に入ると計画停電により暗闇のなか一路片品村へ関越高速を通り沼田インターを下り片品村に到着したのは真夜中近く11時半、バスを下りてびつくり、一面雪、道路は凍結滑りながら坂道を登り岩鞍ハウスへ到着、関係者の暖かい歓迎を受ける。

翌朝から避難生活が始まる。心配ごとは9月から始めたC型肝炎のインターフェロン治療、しかし、片品村では治療する病院はない。沼田市まで行って病院を探さなければならぬので片道1時間バスに乗って沼田市まで行く。

渡利中央病院肝臓内科へ週1回通院することになり原町へ戻る5月末まで通院、その間副作用で食欲がなく体重が52kgまで減り血液検査で栄養失調ですと通告されましたが体調は良く毎日山菜採りに明け暮れておりました。

諸般の事情により原町へ戻ることになり避難者仲間の見送りを受け上越新幹線、東北新幹線、バスを乗り継ぎ原町へ戻る。

途中、相馬から原町へ向かうバスの中から見た景色は何とも言えない程悲惨な光景でし

た。流れ着いた漁船が田んぼのあちらこちらに、自動車等がスクラップ状態で転がっている有様、また、海岸線に目を向けると今までは海を直接見ることができなかつたが6号線から海が直接見える状態は非常に異様であった。

原町駅に着いたが今までタクシーが止まっていたところに車の姿がない。

無理もない、今は電車も走っていない状況からすると当然である。電話でタクシーを呼ぶが時間がかかるとのこと、待つしか外に方法がないのである。しばらくするとタクシーがきた。運転手さんにとりあえず小学校まで行くようお願いし、2カ月前に小学校の校庭に置き去りにした自家用車が動くかどうか校庭に着くやいなやエンジンを駆けてみた。動いた、ラッキー、さすがマイカーだと感心荷物を入れ替え自宅に3カ月ぶりに帰還、やっぱり自宅はいいなあと爆睡。

次の日、自が覚めると今までと違うような気がした。

今度は原町での通院治療が始まり54週終了まで通院、完全にウイルス消滅。今や、25年間やめていた飲酒ができる状態になり毎日楽しく晩酌しています。震災で元気になったのは岡本さんだけだ等語りぐさになっています。

仲間の絆に感謝



電原町退職者の会
半谷 敬一

2011年3月11日に発生した東日本大震災による地震と津波、加えて起きた福島第一原発事故は、南相馬地区が太平洋沿岸に沿っていたため大津波で被害を受けると同時に、原発から30km圏内にある事から、一時的にほとんどの会員が避難を余儀なくされ、何も持たずに身体一つでとにかく遠くに逃げようというパニックの状態で、私達の平穏な生活が一変させられました。



2011年3月11日 大地震後の津波の状況
(海岸から1km離れた自宅の裏の高台から)

私の家は、海岸線沿いから1km位離れており、津波が来ても大丈夫と思っていました

家の中から海岸線沿いの松林の上に津波の波が見え、慌てて裏山の高台に避難しました。その後、5分位で家まで津波が到着、我が家も床上まで浸水しました。当日は地震の余波もあり、高台の隣組の家にお世話になりました。次の日は電気、水、食料品の調達に奔走12日の夕方になったら、福島第一原発が爆発したらしいので出来るだけ遠くに逃げろという情報が入り、近所の車で隣の避難所まで避難しました。その2日後には、また原発が大爆発し、また遠くに逃げろと言われ、二本松市、群馬県館林市と何度も避難場所を転々とした生活を送りました。

当時会員は、避難先を何回も移動しており安否の確認が最優先課題でありました。北海道から九州までの広範囲に避難しており、全員の安否の確認が出来たのは7月になってからでした。幸いに亡くなった会員は1人もなく安心しましたが、被害は家屋の流失2件大規模半壊1件、半壊2件、一部損壊多数と被害の大きさに唖然としました。その後、30km圏内の会員は避難解除を受けて状況を判断しながら自宅に戻ってきていますが、20km圏内の会員はまだまだ戻れずにいますし、また放射能の不安から避難生活をしている会員も残っています。

今、震災から2年7カ月が経過しようとしていますが、いまだに復興・復旧が進んでいない状況であります。また、放射能の除染が進んでいない事や原発事故の相次ぐトラブルで、収束の見通しがたっていないために、戻った会員も、避難している会員も、原発の安全や健康に対する不安を抱えて生活をしている現状であります。特に震災後、健康が悪化して亡くなった会員や介護が必要な会員も増えている事や、未だに戻れない会員の家屋が長期の空き家の状況から傷みが激しくなっている事など心配です。今は、会員が一日も早く戻る事が出来、震災以前のように、安心して暮らせる事ができるよう願っています。



2011年7月11日
原発事故により避難生活で一時帰宅時の現況
(海岸沿いの家は流失、松林もほとんどない)

最後に、震災に対し全国の仲間から、暖かいお言葉とご支援をいただき、生きる勇氣と希望を与えてくれた事に心から感謝と御礼を申し上げます。



2011年8月16日 一時帰宅時の自宅
(津波の被害と避難で空家状況から荒れた建物)

あの時わたしは…



電電相馬クラブ
草野 拓也

あの時わたしは、相馬市の郊外の松川浦パークゴルフ場におりました。

相馬市パークゴルフ協会の会合に出席中で会合も終盤に入った「その時」でした。

建物が大きく揺れ出し「大きい、大きい、

これは大きい」と全員ですぐに会場の建物から外に飛び出しました。外には出たものの大きい揺れは強弱を繰り返しながら治まらず長時間続き、自前の地面に液状化現象が起こりびっくり仰天驚きました。

治まるまでの間、脳裏に感じたことは、「この場所はどうなるんだろう」「地割れで身体が落ちないか」「近くにある電柱や電線は倒れてこないだろうか」「日本沈没だ！……！」
：当時は真剣に思いました。揺れが治まると家のことが心配になりました。

会議もそこそこに海側から山側へ車で家路に向かいました。

道路は陥没したところや、マンホール蓋のあるところは高くなっていました。カララジを点けていたのですが大変なことになっているようだが内容はよく覚えていません。

帰宅途中、通行に支障ある垂れ下がった電線を始末している方のお手伝いをして自宅に戻りました。家にいた家族は地震の恐怖と余震のため庭木の根元で震えていました。

早速被害状況を確認したところ、プロパンボンベは倒れ、屋根瓦は落ちて散乱、ソーラ給湯設備は倒れ、室内では台所をはじめ棚の物は飛び出し散乱、タンス類は倒れ、クロス張りは破れ、和室の壁はハガレ落ち、足の踏

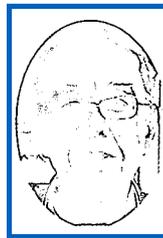
み場ありませんでした。墓石も倒れました。幸い電気、水道、ガスは止まることなく助かりました。最初のやるべきことは寝る場所の確保でした。余震があるのでしばらくの間コタツで寝起きし、連日、片付けでした。

一方、テレビ報道を見ると大津波が打ち寄せてくる様子が映し出されていました。幸い我が家は地震の災害で済んでいましたが津波で被災された方々は大変なことになっていると思います。

当日の夜に東京電力の第一原発が事故のため3 km以内は「避難指示」が出たとの報道がありました。以降、避難指示は10 km、20 kmと拡大し、30 kmまでは外出しないで窓は閉めておくことなど報道されました。わたしのところは原発から40 km位の所なので避難はしませんでした。近所の数人の方は自主避難しました。2、3日後からの食料の買い物は早朝から長蛇の列で品数の制限があり、ガソリン・灯油も同様に購入量の制限がしばらく続きました。遠方の家族、知人からの食料品などの贈り物は助かりました。その後、市に支援物資が全国から多く寄せられたでしょう、私たちも列に並んでありがたく頂きました。振り返れば当地区でも津波ですべて流されてしまいました。幸い家族の方々は無事でした。

冒頭の会合場所も津波で1階部分が浸水したそうです。わたしの場合、早く家に向かったのが良かったと思います。原発事故に係わる放射能汚染の影響は計り知れないものがあります。一刻も早く安定した収束を願ひ、元気で明るく安心して暮らしたいものです。

ほんとうの空が還る日



電友あさか会
大沼 正典

毎日、福島第一原子力発電所関連のニュース報道がない日はありません。今日の紙面は「汚染水リスク未対応多数「建屋から漏出」」。テレビでは「染色体検査浪江町が導入」のニュースを報道しています。

あの日から、先の見えない不安の日々が始まりました。震災の被害は、マンション室内設置型温水器のタンクが倒れ温水がすべて室内に溢れ出てしまい全部屋水浸しになり、家の嫁入り道具の家具なども倒れてしまい結局すべて廃棄処分することになってしまいました。が…。

そのため被害が比較的軽微だった福島市に住む娘の家で一夜を過そうと思ひ、近くで唯

一開いていた小さなスーパーで「インスタント食品、ミネラルウォーター等」を沢山買い込み、夜半に福島に向け郡山を車で出発しました。東北道は閉鎖しているため国道4号を北上したもののひどい渋滞。ラジオは緊迫した声でアナウンサーが刻々と入ってくる災害情報を伝えていました。

小雪の舞う中、5時間ぐらいかかって深夜2時ごろ福島に到着したと記憶しています。

次の日の午後「絶対事故は無い」という「福島第一原子力発電所の安全神話が崩壊」しました。そして「放射性物質の拡散対策」が後手後手そして対応ミス続出、情報開示をしない「頼りにならない政府と福島県」に憤っていたことを鮮明に覚えています。

3日目の深夜。福島の身重の娘から連絡があり「長女と二人栃木県のS市に一時避難するので家内に行きしてほしい」とのこと。

今思えば：当時は、「放射性物質の拡散情報」が混乱しており、娘は自己判断で「一時避難」を決めたようでした。

翌日の早朝、私の運転で4号線を栃木県に向け出発しました。ガソリンを満タンにして出発したかったのですが、供給がストップしているため給油待ちの車がスタンドを取り囲んでおり時間がかかると判断。少し不安が

あったのですが、メーター半分で出発することとなりました。ひどい渋滞の連続。宇都宮午後2時ごろ通過。S市のホテルには日もとつぷりと暮れた午後6時ごろ到着しました。

ホテルには福島県内から20人ぐらい避難して来ており、中には三世代8人で避難している家族もありました。結局、このホテルに嫁たちと家内は1ヶ月近く滞在することになったのです。

娘の長女は、4月から小学校入学を控えており、すぐにでも居住地を決める必要があり東奔西走し、何とか確保することができ無事小学校に入学することができました。

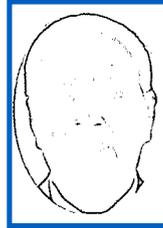
お陰様でその年の5月には3人目の孫に恵まれました。私たちも娘たち家族の近くに転宅することができて今日に至っています。

しかし、まだ「終の住まい」はどこにするか…心は大きく揺れています。出来ることならば福島に帰り骨を埋めたいのです。

先日、安倍首相はオリンピック招致の最終プレゼンテーションのスピーチで「汚染水は港湾内で完全にブロックされている。コントロールされている」と発言しました。結果、2020年の東京オリンピック開催が決定されたようです。開催が決まった以上、原発事故の收拾に加えて被災地の復興にも本腰を入

れてほしい。オリンピックまでの7年間で何らかの結果を出してほしいと思います。が、それを担う復興庁の影が薄いのはなぜなのでしょう。本当に心もとない。国がリーダシップを発揮すること切に期待したいと思います。「福島にほんとうの空が還る日」は、いつの日なのでしょうか…。

千年に一度の地震に遭遇するとは!!



電友あさか会
今野 浩

東日本大震災から早や2年半が経ち、電友会の方より震災について何か書いて欲しいとの御依頼を受けました。今から当時を振り返ると、平成23年3月11日は、午後から郡山市民文化センターの大ホールであさかの学園大学の卒業式の最中でした。携帯電話の緊急エリアメールがけたたましく鳴り、あわてて電源をオフにする操作をした。その数秒後、「地震だー」と叫ぶ人が何人かいて、私も揺れを感じ、隣り合わせの方と地震がおさまるのを待っていました。しかしおさまるところか、ホールの揺れはだんだん大きくなり、また地鳴りまで伴ってきた時、今まで経験のない激

しい振動で、立っている事も困難となったため、まず天井からの落下物から身を守るため持っていたバックを頭巾代わりに頭を被り座席の間にうずくまっていました。一瞬だけ揺れがおさまったと思いホールを脱出しようとしてと床面を見ると、ほんの1.5メートル程の近くに、照明が落下しており、顔色が無くなっていくのを感じました。直撃していたなら大怪我をしていたのではないかと思うと今でもぞつとします。ホール、玄関のシャンデリアが想像もできない程大きく揺れていて、命からがら小雪舞う外に出ました。

まず、自宅に電話するも接続せず、郡山市立図書館前の駐車場まで急ぎ、そこから4号線に出ようとした渋滞で動かない。迂回して細道に入ったが、ブロック塀が倒壊して進めない。49号線に出ようと考え、交差点を右折したところ、前方のビルが45度も、倒壊し道を塞ぎ、ここも前進できず、あちこち廻り道をしてようやく自宅に辿り着いた次第です。

近くで商店を営む義母の家に行ってみると棚からほとんどの品物が落ちビン類やガラスは割れ、外壁のモルタルが剥がれ落ち、義母はあと数十秒建物から離れるのが遅れていたら命の危険もあったとの話でした。無事を確認して自宅に戻り自宅の状況を見たところ、

2階の南側窓際の中心柱が陥没し、壁は崩れタンス本棚も倒れ、物は散乱し足の踏み場のない有様でした。

これからも余震は数年続くと思われるので今回の地震を教訓として常に準備をし、伝えていかなければならないと思っています。また福島県はその後の原子力発電所の爆発により放射能の恐怖にさらされ続けることになってしまいました。今後は是非再生可能エネルギー開発を進め、安心・安全な生活のできる、そして若者達にとって希望のもてる日本になっていくことを心から願っています。



鉄パイプで中心柱を支えている所

私の3・11



白河地区電友会
関戸 忠義

平成25年9月20日深夜の午前2時25分、いきなり地面から突き上げるような強い揺れを感じて寝ぼけ眼で2階のベットから飛び起きたが、揺れが強くて動けない。20〜30秒過ぎて揺れが治まってから急いで階段を転げるように駆け下りた。

福島県いわき市の内陸部を震源地とする震度5強の地震で、東日本大震災の余震とこのとであったが、2年半前の記憶がまざまざと蘇り、久々に恐怖を感じた瞬間でした。

わが家は小高い丘の頂上に位置し、家は昭和56年に新築したが、その際、宅地部分を1メートル盛土したため、どちらかと言えば周囲の家より揺れに弱い状態ではありました。

このため、自宅での揺れを感じる度合いは発表される震度に1+〜+2が妥当かなと思うほどです。

生涯忘れることの出来ないあの忌まわしい東日本大震災発生時は、私は家内と自家用車で4号線を郡山方面に向かっけていて、丁度白河市の金勝寺橋を過ぎたところで今まで経験した事の無い、車が直進出来なくなるほどの

揺れを感じ、瞬間にタイヤがバーストしたと思ひ減速し道路左端に寄せようとしても思うようにコントロール出来ず悪戦苦闘を繰り返していましたが、周りの電柱が今にも折れそうな位に揺れ動いており、前後の自動車も一斉に道路上で停止したまま左右に激しく揺れ動いている様を見て、大地震が発生したと察知しました。

実は、家では年老いた母が一人で留守番をしており、家内に「母が心配だからこのまま家に戻る」と言い、直ぐさま方向転換して家に向いました。

途中、道路は段差や亀裂が走り走行しにくい状況でしたが、通常10分位のところを小1時間かけて家に着き周りを見渡した所、一見わが家は何のダメージも受けて無いよう屋根瓦が一枚も剥がれ落ちて無く、ほっと安心しながら玄関に周り込んでみて仰天、入口の柱が土台から外れかかり屋根が傾き、窓ガラスは割れ雨戸は剥がれ、庭の木々やガーデンテーブルは倒れ、地震の凄まじさをまざまざと見せつけられ言葉が出ませんでした。

それでも玄関の戸をこじ開けた瞬間、中の様子が目に飛び込んできました。玄関ホールは見る影も無く、あらゆる物が倒壊や破壊されウインドケースのガラスは割れ、足の踏み

込める隙間も無く、見るに耐えない状況でしたが、そんな中で大声で母を呼びましたが応答が無く、万一の場合を覚悟して部屋に踏み込み、母が居たと思われる場所を見ると、倒れた品々で堆く盛り上がっており、倒れた品々の下敷きになっていくかも知れないと判断し、危険をも省みずそれらを取り除いたが幸いにも下敷きになっておらず、各部屋を探しても見つからず、余震が激しくなってきたので表に出ました。

改めて、大声で母の名を呼ぶと遠くの畑の中のビニールハウスの中から母が涙ながらに出てきた時は、思わず無事を確認した喜びで3人で泣きながら抱き合いました。

母は幸いにも掠り傷一つ無く、その瞬間はたまたま窓際に居て地震が起きて直ぐに外に駆け出したそうです。その後の余震では一人でいた為、恐怖のため畑の中のビニールハウスの中に逃げ込んだとの事でした。本震の後の余震が一向に止まず家の倒壊も時間の問題と覚悟し、3人で車に乗り込んでまんじりともしないまま夜を明かしました。

夜が明けてから改めて家の周りを詳細に点検するとお風呂の外壁が崩れ落ち、家の外壁は至る所に亀裂が入り、損壊の凄まじさを改めて実感させられました。

家の中は足の踏み場も無く洋間は食器棚から落ちた食器や倒れた家具でドアが開かない状態、和室は和棚が倒れ30年以上かけて集めた古い電話や美術工芸品が、倒れた和棚の下で無残な姿に変わり果てていました。

母屋の、国や市の家屋損壊判定の結果は「半壊」。

別棟には子供の勉強部屋があったのですがそこは全壊でした。

しかし、大震災後に起こった原発事故！そして放射能の拡散！その時放射能の後遺症など気にかける余裕も無く、大震災は毎日朝から晩まで家の周りの仮修復作業でしたが、その時期が放射能の拡散で人体に計り知れないダメージを与える危険な状況下だったのですね。

今まで見たことも無い気色の悪い紫色の朝の太陽の色！明らかに原発事故による放射能の粉と思われる塵埃（金属の粉状のもの）が朝日に照らされキラキラ当たり一面に地面で輝いていたのが昨日のようです。やっと朝の太陽は黄色に戻って来ましたが少なくなったとは言え、今でも金属の粉状のものは降り続いています。

つい先日、遅まきながら白河市で行った放射能値の検査では我が家は0.25マイクロ

シーベルトで政府発表の0.23マイクロシーベルト以上なので除せんの対象となりました。

あれから2年半過ぎ、日常生活に支障がないくらいにはなった我が家ですが、まだ修復や片付けの手を付けていない部屋が残っていますが、気力が薄れ頑張る気になれない諦め気味の自分がいます。

震災時の経験



いわき電友会
古市 三久

2011年3月11日午後2時46分、友人と車から降りた時だった。激しく長い揺れが体を襲った。咄嗟に車の屋根に手を突いて揺れから体を守っていた。揺れが止まった時、隣の家の屋根に瓦は1枚も残っていなかった。

これまで体験したことのない激しい揺れを感じたが、その時津波の襲来は思いも寄らなかった。それから30〜40分後に大津波がいわき市の沿岸部を呑み込み壊滅的な被害をもたらした。

11日の夜から、原発の爆発を様々なルートで入手した人々が避難を始めていた。私の周

りでも避難者は日ごとに増えていった。いたるところに長蛇の列ができた。給油する車、買い物、水汲み、食料配給等々。

被災者への支援活動を始めるにもまずガソリンの確保だった。買い置きのものがあったことなど、とりあえず確保の目的が立った。軽トラックを使い、競輪場から介護施設へ食料など運搬を始めた。知人からのメールによる情報提供が役に立った。数日すると市からの物資配布の情報も届きはじめたことから、施設の車が競輪場に来るようになってきた。私はこれを潮時に運搬を終了した。

それからは、避難所を回った。最初に言われることは、「今まで何をやってた」「議員は選挙のときだけで何の役にも立たない」というお叱りだった。時間をかけて話を聞いて回った。その場から携帯電話で県、市に被災者の声をつないできた。すぐに解決できたこともあったが、役所都合等で解決できないことが多かった。

発災当初は、避難所は衣食住の不満・不安と情報・物資の不足が重なり、議員、役所への批判の声が噴出していった。未曾有の災害といっても、これまでの災害救助訓練が形骸化していたことの証左でもあった。

福島県は他の被災二県とは様相を異にして

いる。それは放射能による被曝である。原子力発電所は、過去にも賛成・反対で地域を分断してきた。今次の東京電力の「人災」による原発爆発事故は、地域と家族を悉く分断した。放射能が消えるまで待っても、この分断を修復することは不可能だ。

発災後、役所は直ちに対策本部を立ち上げたが、人・物・情報不足で機能するまで時間がかかった。一方、衣・食に対する民間ボランティアの対応は敏速・果敢だった。今次の震災は、災害に備えた訓練は机上の空論だったことを証明した。

今回の原発震災は、「国民の生命を守らな」という国の姿勢も証明した。原発が爆発したときの国民への政府の説明は、ウソと情報隠しだった。放射能の影響に対して「直ちに影響はありません」という政府高官の発言はそれを示している。

福島県は約40年にわたり原発により経済的な恩恵を受けてきた。しかしこれから100年単位で放射能の影響が試される。

原発事故は収束に向けて作業が進められているが、すべて手探りという状態で推移している。また、東電の姿勢は汚染水の対策に見られるように、住民不在に終始し事故前とほとんど変わっていない。

福島県はこうした膠着状態が長期間続くことになる。

最近、福島原発事故県民健康調査の闇という本が岩波書店から発売された。このとおりとするなら福島県民は「棄民」ということになる。

避難所で共に過ごして



いわき電友会
若松 隆

私は東日本大震災を旅先で知りました。日本からの飛行機が来ないとのことで、4日間足止めをくい3月16日、ようやく成田に着きました。

息子が迎えに来てくれ、そのまま埼玉の息子宅で避難生活に入りました。

母や娘夫婦、愛犬も10時間かけて、いわきから避難してきていました。

1週間世話になった後、息子が止めるのもきかず、いわきへ戻りました。

私の家は海岸線より2km程内陸にあり、津波の被害はなく地震による屋根瓦、室内壁、食器等の損傷で済みました。

しかし、海沿いの友人宅は津波に流され全

壊、海岸線地区の惨状に言葉もありませんでした。私の勤める、いわき市の体育施設「南の森スポーツパーク」は錦町の小高い丘の上であり、その体育館が避難所になっていました。

私が職場復帰した時、約100名が避難生活をしていました。

避難所での生活に落ち着きが出てきた頃、4月11日・4月12日に勿来・田人地区に限定された直下型地震・震度6弱が2日連続で襲いました。

原発事故による双葉郡からの避難者に加え余震の恐怖を感じた地元の人達が多く避難してきて、最多で400人の避難生活が始まりました。避難所の運営は、いわき市の福祉センターの職員が交替で24時間体制で対応し、私たち体育館管理人はそのサポートにあたりました。毎日のように支援助物資が届き、その整理や管理に追われました。

多くの有名人が励ましに訪れ、各種イベントも沢山行われました。

秋篠宮様・紀子様もおいでになりました。紀子様にはハグをねだる失礼な女性がいたので、紀子様はほほ笑みを絶やさず、優しく抱き寄せました。その気高さに感激しました。

自衛隊・警察・消防・行政の方々の献身的

な働きに頭が下がりました。

震災を経験し、大事なものはモノではなく心であると痛感しました。

5か月に亘った避難所生活で出来事も起こりました。

原発事故で双葉郡から避難していた人達がそれぞれ別の施設へ移ったあと、なぜか地元の家があるにもかかわらず、避難所から自宅へ戻らない30数名が残りました。そこに革新団体を名乗るD氏が、A新聞の記者と共に事務所に乗り込んできたのです。避難者の誰かがネットで呼び込んだようなのです。

その記者は当施設の長であるI氏に対し「当施設で支援助物資の横流しがあった」との情報を得たというのです。取材のはずが糾弾の場と化してしまいました。長い時間、一方的に追及されていた温厚なI氏は、最後に静かに言いました。

「それは私です。私自身津波で家が流され、ここに寝泊まりしていますが、地元が心配で行ってみると、海辺の小さな避難所に津波に追われ、着のみ着のまま逃げた人達がたくさんいました。この寒い中、子供たちが裸足だったのです。支援助物資は何も届いていないのです。かわいそうでたまらず、福祉センターの所長に許可をもらい、南の森の倉庫か

らとりあえず靴と靴下が入った箱を運んだのです」

この真実をついた言葉の重みに記者の追及は止まりました。記者は静かに事務所から退出していきました。当然この件が記事になることはありませんでした。

避難所で共に過ごして、すばらしい人にもたくさん会いました。

定期的に来訪し、状況を把握したあと、今何が必要ですか？と尋ねきちんと対応してくれた自衛隊の若き武官。いつも部下を従えていました。

ボランティアが作る食事の献立表を2ヶ月に亘り毎日作成してくれ、いつもニコニコして、みんなの太陽のような存在だった中学校の女の先生、勤務を終えると毎日来てくれました。

困っている人がいると黙っていられず、白河市から来て体育館に寝泊まりし認知症気味のおばあさんの世話をしてくれた元保健婦さん。役目が終わると次のボランティアのため石巻の避難所に移っていきました。

ホテルオークラのコックさんにも感激しました。サポートの人も疲れているでしょう、とおいしいカレーをつくってくれ、ホテル限定のチョコレートをたくさん置いていきました。

た。その気配りに「さすが」と思いました。あれから2年半経ちました。テニスコートから聞こえてくる子供たちの歓声をききながら、一日も早くみんなが日常に戻れるよう折っています。



会津電友会
岩橋 克子

東日本大震災に思う

あの日私は、昼食後夕食の献立を考えながらのんびりとテレビをみていた。突然強い揺れがかなり続き、「早く外へ!」と、急いで夫と庭に飛び出した。余震が数回あり一応おさまったので家に入りテレビをつけた。

テレビでは、今までに経験したことのないマグニチュード9.0という地震が発生し、太平洋沿岸地域を中心に甚大な被害をもたらしたと放送していた。宮城、岩手、福島の津波による被害状況が映し出され、現実とは信じがたい映像に驚くばかりだった。会津地域においても震度5強を観測した。

又、電友会東北地方本部からの協力依頼があり役員会を開き、とり急ぎ義援金を送った。私が所属している奉仕団体・国際ソロプチ

ミストは、県内に12のクラブがあり毎年研修会を開催している。2011年度は、開催について迷いはあったが、そのような時だからこそ一堂に会して情報を交換、絆を深めようと、震災発生から7ヶ月後の10月に喜多方で開催、85名が集まった。

テーマは、「東日本大震災に関わる情報交換」その一部を紹介します。

・会津若松地区

会津最大の産業、観光業は一時全く客足が途絶え、関連企業は計り知れない損失に事業の継続する危ぶまれる状態となった。米については、放射線が全て国の基準値を下回るか全くゼロで出荷の許可が下りたが、果たして売れるのか、非常に心配だと言う声があった。一方、原発事故により避難を余儀なくされた大熊町の町民が、町ぐるみで会津若松市に移転。役場・学校・宿泊など施設が空いたため、受け入れることが出来た。

・会津坂下地区

阿賀川に流れ込む数本の川の合流地点のため沼地が多く、道路や土壌の液化現象が数ヶ所に見られた。土蔵の全、半壊が多くあり、町の蔵の7、8割を取り壊すことになった。幸い人的被害はなかった。

・喜多方地区

人的被害はなく、建物等の被害は小規模なものだったが、交通事情の悪化、受注のキャンセル、取引先等の被災による影響が出た。更に原発事故による風評被害により、農作物食品加工物等の出荷停止、修学旅行や、農業体験の予約がキャンセルされた。

今、喜多方市内には、1市民の好意により相双地区から避難している方々の為に、☆そうそう絆サロン喜多方支部被災者集会所☆(写真)が、常時開放されている。

いっどこで、何が起こるかわからない世の中、物心の整理整頓を心がけ、一日一日を大切に過ごしたいと思う。



そうそう絆サロン集会所